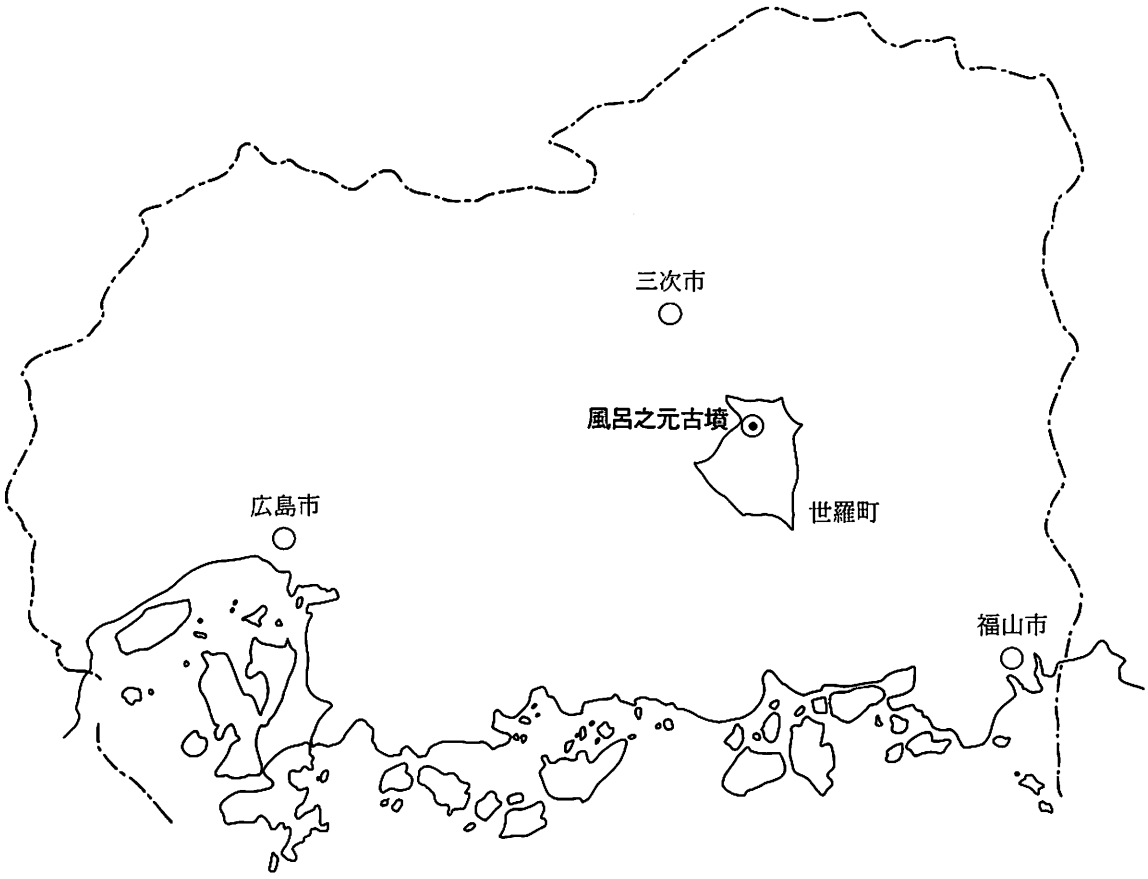
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第177集

風呂之元古墳発掘調査報告書

1999

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

風呂之元古墳発掘調査報告書



1999

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は，1998(平成10)年度に発掘調査を実施した広島中央区域農用地総合整備事業に係る風呂之元(ふろのもと)古墳の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，農用地整備公団西部支社から委託を受けた財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　発掘調査は，石井哲之，橋坂久己，岡野克巳が担当した。

4　出土遺物の整理，復元，実測，図面の整理，写真撮影は，岡野が中心となって行った。

5　本書は，岡野が執筆・編集した。

6　遺物実測図の断面は，須恵器：黒ヌリ，金属製品：斜線，その他：白ヌキである。

7　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

8　第1図は建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（備後小国・本郷）を使用した。

9　本書に使用した方位は，第1図を除いて，すべて磁北である。

10　石室に使用された石材の名称は，考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

遺跡見学会

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（2）
Ⅲ　調査の概要……（5）
Ⅳ　遺構と遺物……（6）
Ⅴ　まとめ……（15）

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）……（3）
第2図　周辺地形図（1：1,000）……（5）
第3図　調査前地形測量図（1：150）……（7）
第4図　墳丘測量図（1：150）……（7）
第5図　墳丘土層断面実測図（1：60）……（8）
第6図　外護列石実測図（1：40）……（9）
第7図　石室実測図（1：60）……（10）
第8図　石室内遺物出土状況実測図（1：40）……（12）
第9図　石室内出土遺物実測図（1）（1：3）……（13）
第10図　石室内出土遺物実測図（2）（1：2）……（13）
第11図　調査区内出土遺物実測図（1：3）……（14）

図版目次

図版1　a　古墳遠景（南東から）
　　b　古墳遠景（南西から）
　　c　調査前近景（南東から）
図版2　a　作業風景（南から）
　　b　墳丘検出状況（南から）
　　c　墳丘検出状況（北東から）
図版3　a　石室（南から）
　　b　奥壁（南東から）
図版4　a　石室内（南西から）
　　b　遺物出土状況（石室中央）
　　c　遺物出土状況（開口部側壁側）
図版5　a　基底石（南から）
　　b　完掘（南から）
　　c　調査後遠景（南東から）
図版6　　出土遺物

Ⅰ　は　じ　め　に

風呂之元古墳の発掘調査は，広島中央区域農用地総合整備事業に係るものである。当該地域は，広島県の中北部に位置し，その大部分が世羅台地と呼ばれる丘陵台地となっている。近年，国・県営事業などにより農地開発が行われる一方，農業基盤整備事業の導入によって，より生産性の高い生産団地の形成や生産者の組織化が行われ，農業全体の再編が進められている。しかし，食料需要の多様化，産地間競争の激化など農業を取り巻く情勢は厳しいものとなっており，大きな転換期を迎えている。こうしたなかで，需要動向に即した農産物の安定供給と高生産性農業の育成及び流通の合理化を図るとともに，山陽自動車道や広島空港等を活用し，京阪神方面，広島，九州方面への迅速な流通を実現することで，当該地域の活性化に資する目的で本事業が計画され，進められている。

農用地整備公団西部支社広島中央建設事業所（以下，「中央建設事業所」という。）は，1997(平成9)年4月8日，当該事業予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会(以下，「県教委」という。）に協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，同年5月14日中央建設事業所に対して，事業予定地内に風呂之元古墳が存在する旨を回答した。本古墳の取扱いについて，県教委と世羅町教育委員会（以下，「町教委」という。），中央建設事業所は協議を重ねたが，路線変更等による現状保存は不可能であった。中央建設事業所は同年5月30日付けで埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を行い，同年6月27日 県教委は，中央建設事業所あてに，工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。

発掘調査に関しては，同年11月19日付けで中央建設事業所から県教委あてに依頼があり，県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が行うことが適当であると通知した。これを受けてセンターは，1998年3月12日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を文化庁長官あて提出した。また，中央建設事業所とセンターとの間で，1998年4月1日付けで委託契約を結び，4月13日から6月5日までの約2か月間発掘調査を実施した。なお，5月30日には遺跡見学会を町教委と共催で実施したところ，約150名の参加を得，盛況であった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，また，当該地域の歴史の一端を知る一助となれば幸いである。

発掘調査にあたっては，農用地整備公団西部支社広島中央建設事業所，世羅町教育委員会及び地元の方々の多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

なお，風呂之元古墳の名称は，当初，椋目4号古墳（文化財保護委員会『全国遺跡地図（広島県)』1967年)，次に椋目北古墳（財団法人国土地理協会『全国遺跡地図　34　広島県』1982年，広島県教育委員会『広島県遺跡地図』Ⅴ　1998年）と呼称されていたが，今回の発掘調査にあたり，改称された。

II　位　置　と　環　境

風呂之元古墳は世羅郡世羅町大字徳市字風呂元560番地の1に所在する。

世羅町は広島県東部，備後地域のほぼ中央に位置する。一帯は標高400～600mのいわゆる「世羅台地」と呼ばれる高原台地といくつかの小河川によって形成された谷盆地から成り立っている。また，世羅町は日本海にそそぐ江の川水系と瀬戸内海にそそぐ芦田川水系の分水嶺にあたっており，主要河川に流入する小支流によって狭小な支谷が多く形成されており，その大部分が耕地として活用されている。

町内の遺跡は，江の川の支流である馬洗川と美波羅川の流域，芦田川流域の3地域を中心として分布している。本古墳は馬洗川の上流域に位置し，標高約460mの西から東へ延びる丘陵の南側斜面に立地している。

以下，時代ごとに調査，報告されている遺跡を中心に歴史的環境をみてみたい。

〈縄文時代〉

現在，もっとも古くさかのぼる遺跡は世羅町東神崎の神崎大池1号遺跡で，後期後半に比定される土器片と石鏃が出土している。

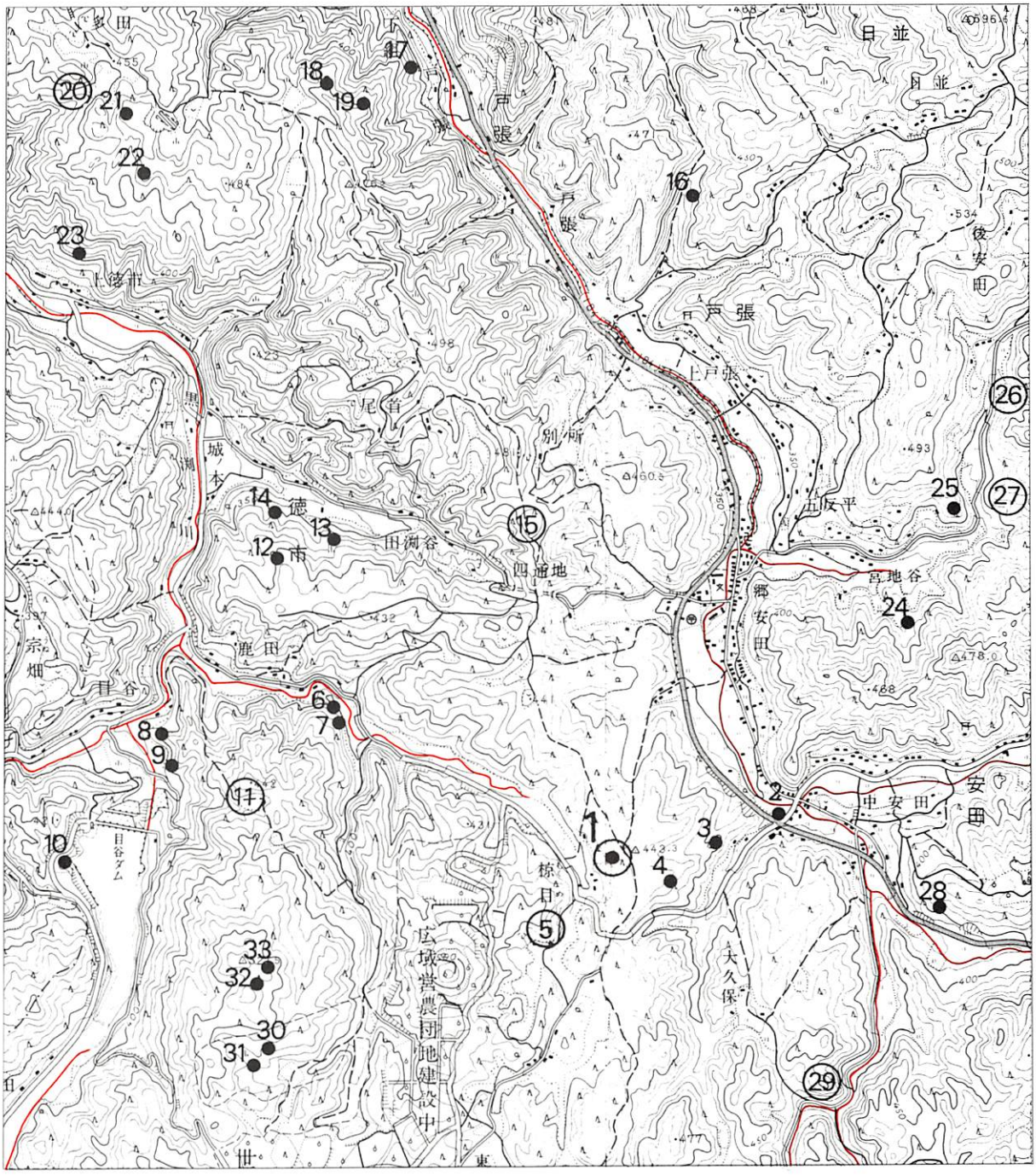
〈弥生時代〉

弥生時代に入ると遺跡数は増加傾向を示しはじめる。前期では寺町で宅地造成中に発見された箕口2号遺跡では多量の土器片と打製石斧，砥石が出土し，3号遺跡では住居跡が確認されている。中期になると約500本の石鏃や人面形土製品が出土した世羅高校3号遺跡[1]，約50本の石鏃や石包丁が出土した大田遺跡，住居跡や溝などが検出された土居丸遺跡[2]などがある。後期では，本郷の藤鞘遺跡[3]で間仕切りと考えられている溝を床面にもつ住居跡が検出されている。そのほか，本郷の音丸遺跡などでも住居跡が確認されている。また，近重山1号遺跡では丘陵頂部から壺，甕形土器などが出土し，石列の存在などから墳墓の可能性が指摘されている。

〈古墳時代〉

古墳時代に入ると遺跡の数は飛躍的に増加するが，確認されている遺跡のほとんどが古墳であり，約500基ある[4]。その分布は先述のように本古墳が所在する馬洗川上流域（安田・徳市），美波羅川上流域（津口），芦田川上流域（賀茂）に集中している。現在町内最古と考えられているのが7基で構成されている東神崎の大久保古墳群で，その築造年代は4～5世紀代に比定されている。そのほか前半期の古墳として，本郷の京磨山第9号古墳では竪穴式石室が確認されている。また，後庵古墳群では箱式石棺が内部主体として構築されている。

一方，横穴式石室を内部主体とする後半期の古墳では，その立地は徐々に支谷の奥部へ移行する傾向にあるようである。このうち寺町の康徳寺古墳は県内有数の規模の横穴式石室をもつ古墳で，この地域が前半期に引き続き大きな勢力をもっていたことを窺わせる。また，被葬者は近接する康徳寺廃寺の造立と関係があったものと思われる。堀越の神田第2号古墳は，石扉を有する両袖式の横穴式石室で，築造は7世紀中頃に比定されている[5]。



第１図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

1．風呂之元古墳	2．大迫第１号古墳	3．大迫第２号古墳	4．大迫第３号古墳
5．椋目古墳群	6．古城古墳	7．鹿田古墳	8．石田古墳
9．石が谷古墳	10．八反田古墳	11．丸ゾウ田古墳群	12．白山第１号古墳
13．白山第２号古墳	14．白山第３号古墳	15．七ツ塚古墳群	16．戸張第１号古墳
17．堂免古墳	18．大将神第１号古墳	19．大将神第２号古墳	20．多田三ツ塚古墳群
21．多田西古墳	22．多田東古墳	23．田中古墳	24．笠張古墳
25．峠山古墳	26．向田古墳群	27．平が迫古墳群	28．溝山古墳
29．木正田古墳群	30．権現山第１号古墳	31．権現谷第１号古墳	32．権現谷第２号古墳
33．権現谷第３号古墳			

一方，西神崎の近成第1号古墳では竜山石と考えられる凝灰岩製の石棺の一部が確認されている[6]。そのほか，徳市の八反田古墳などがある。古墳以外の遺跡では，土馬などの土製模造品が出土した寺町の宇山遺跡[7]，東神崎の宇根山開拓地遺跡[8]では子持勾玉が出土している。両遺跡ともに祭祀に関わる遺跡で6～7世紀に比定されている。

集落では，西神崎の土居丸遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認されている。生産遺跡としては，県史跡に指定されている黒渕のカナクロ谷製鉄遺跡や湯船遺跡など製鉄に関連した遺跡や，自光窯跡，青水窯跡など須恵器の窯跡が確認されている。

〈飛鳥・奈良時代〉

法起寺式の伽藍配置をもち，いわゆる「水切り」のついた複弁蓮華文軒丸瓦をもつ寺町の康徳寺廃寺跡が飛鳥時代末期から奈良時代初頭の創建と考えられている。またこの寺の瓦を焼いたと思われる三郎丸の三郎丸窯跡[9]が確認されている。この窯跡は登窯であることなどから，瓦陶兼業窯であった可能性が指摘されている。本郷の田龍遺跡[10]では円面硯片が出土し，官衙的な遺跡の存在が指摘されている。また，本郷の今東遺跡[11]では墨書土器が出土している。

〈平安時代以降〉

この時期の遺跡は実態があまりよくわかっていない。この地域は，平安時代末期に後白河院に寄進され，その後高野山根本大塔領となり，大田庄として荘園経営が行われた。そのため，廃万福寺塔婆など，当時期の文化財が多く残されている。

参考文献

是光吉基「備後大田庄の可耕地について」『立正史学』第51号　立正史学会　1982年

註

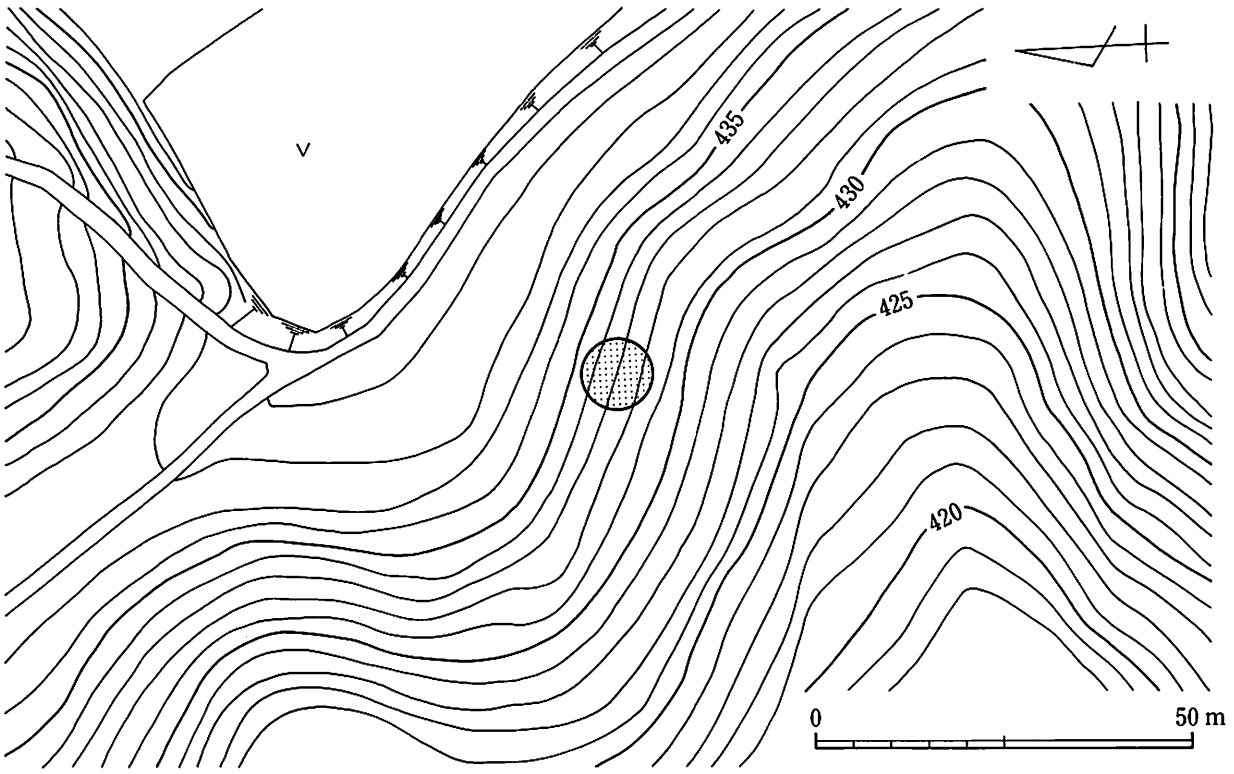
（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「人面型土製品」『ひろしまの遺跡』第20号　1995年
（2）世羅町教育委員会『土居丸遺跡』Ⅰ　1994年
　　世羅町教育委員会『土居丸遺跡』Ⅱ　1996年
（3）河瀬正利「藤鞘遺跡」『日本考古学年報』21・22・23　日本考古学協会　1981年
（4）世羅町教育委員会『世羅町の古墳』　1990年
（5）是光吉基「石扉を有す一古墳について」『広島県文化財ニュース』第60号　広島県文化財協会　1974年
（6）世羅町教育委員会『近成山第1号古墳調査概報』　1991年
（7）是光吉基「広島県の祭祀遺物」『考古学ジャーナル』№5　ニュー・サイエンス社　1967年
（8）波田一夫・是光吉基「広島県世羅郡東神崎出土の子持勾玉」『考古学ジャーナル』№34　ニュー・サイエンス社　1969年
（9）世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺　―発掘調査報告書―』　1995年
（10）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』　1997年
（11）世羅町教育委員会『今東遺跡』　1996年

Ⅲ　調　査　の　概　要

風呂之元古墳は，横穴式石室を内部主体とする古墳である。日本海へそそぐ江の川水系支流の黒渕川最上流部に位置する。周辺にはいくつかの古墳が確認されているが，本古墳は単独で立地している。

調査は，まず地形測量を行い，円墳であると確認した後，すでに露顕していた奥壁と思われる石材と石室の落ち込みを検討し，石室の長軸線を通るように南北方向とこれに直行する東西方向とに土層観察用の畦を設定して開始した。墳丘はその大部分が斜面下方に流出していたが，後世に堆積した土などを除去した結果，残存する封土の状況から直径約 12 m と確認した。周溝は，斜面上方で最大幅約 2.2 m である。

石室は，天井石を含め石材が大量に抜き取られており，奥壁と側壁の基底石の一部が僅かに残存していた。調査の結果，ほぼ南に開口する無袖式の横穴式石室であった。石材の抜き取られた痕跡も含めて検討した結果，長さ約 5 m の石室であったと推定された。石室内からは，須恵器（長頸壺，椀，装飾付須恵器の装飾部分），鉄器（鉄釘，用途不明の鉄器）が出土した。また，周溝内の堆積土中から須恵器杯身が，開口部試掘溝内から似非須恵土師器と推定される長頸壺が出土した。



第２図　周辺地形図（1：1,000）　アミ目は古墳

Ⅳ　遺　構　と　遺　物

立地と調査前の状況（第2・3図，図版1a・b・c）

風呂之元古墳は，世羅町北西部に位置する。江の川水系の支流が形成した開析谷を望む，西から東に延びた低丘稜の南側斜面に立地する。本古墳周辺は僅かな高まりを呈するものの雑木林となっていた。周囲には大迫第1～3号古墳，椋目古墳群などの古墳が点在している。

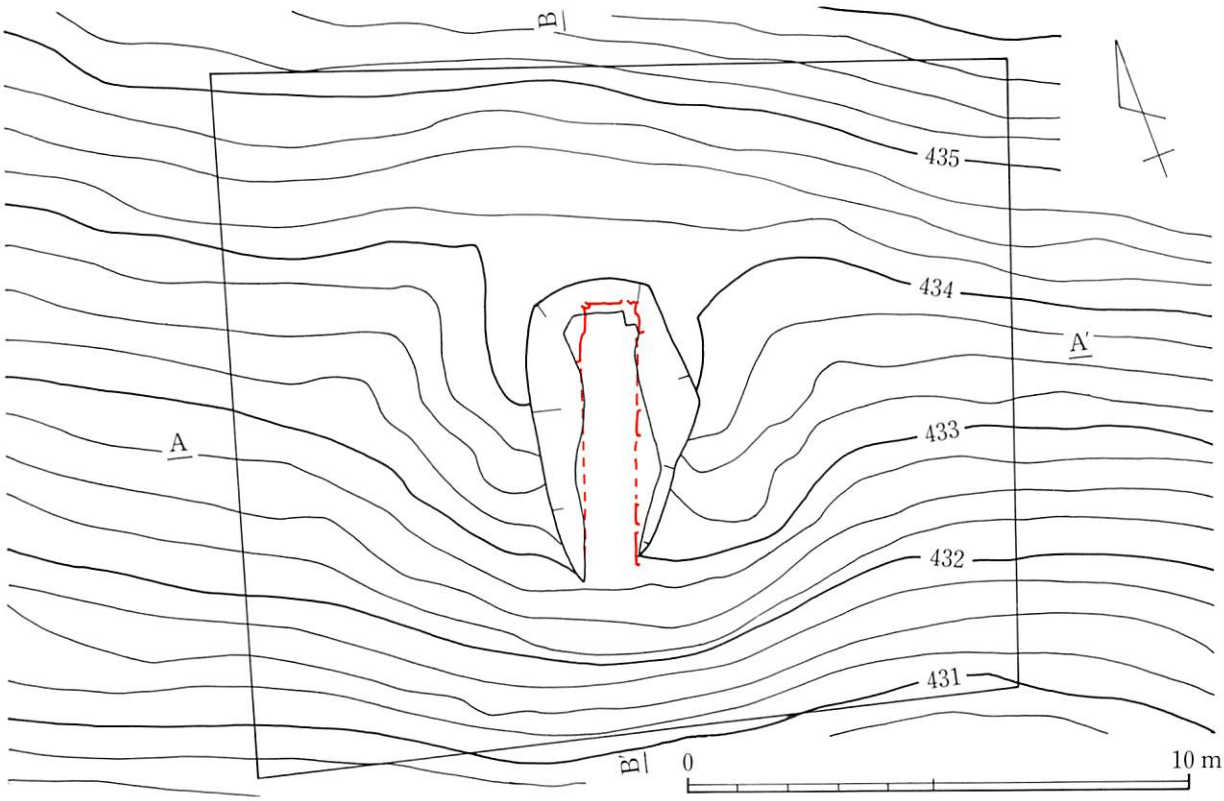
本古墳の墳丘残存部の中央には石室の落ち込みがあり，奥壁，側壁の一部が露顕していた。落ち込みは，石室の長軸と思われる南北方向で4m，幅0.7～1m，深さ0.6mを測り，石材の抜き取られた痕跡と推定された。古墳は南側の谷底からの比高が約20mあり，急峻な斜面に築かれている。斜面上方には周溝と思われる僅かな窪みがみられ，直径約12mの円墳であることが推定された。また，窪みと墳丘の頂部との高低差は10cm程度で，墳丘の大半は流出もしくは削平されていると考えられた。

墳丘（第4・5・6図，図版2a・b・c）

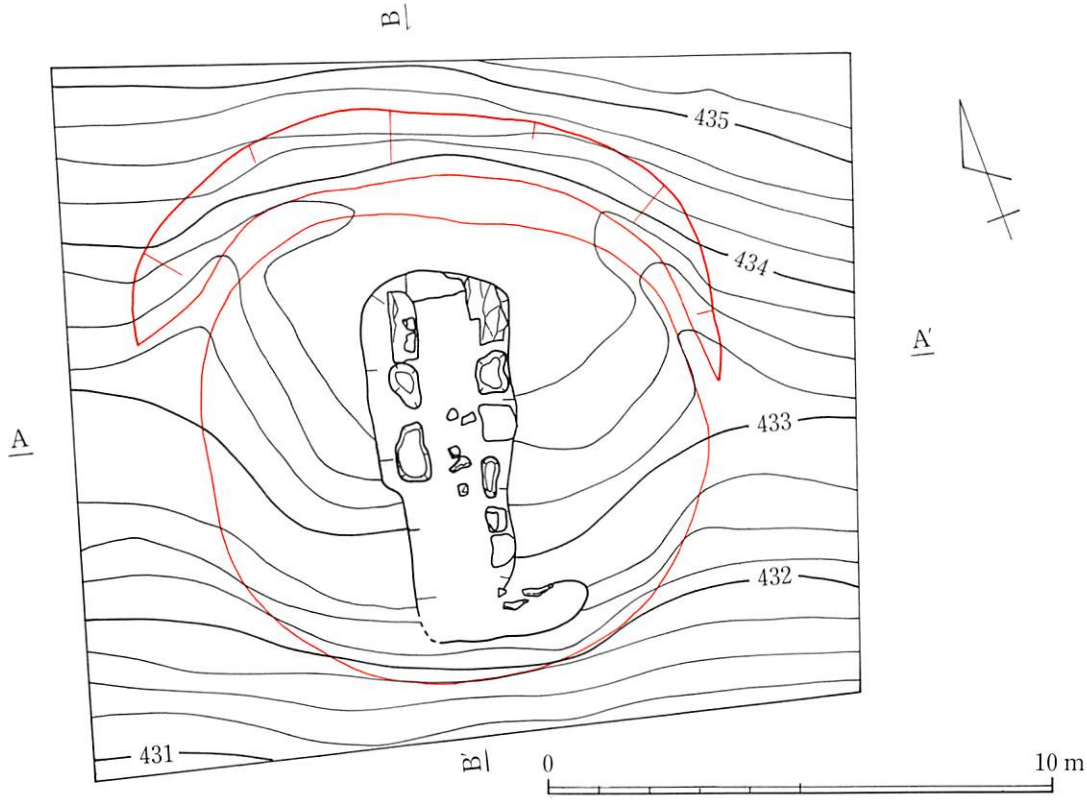
墳丘は，上部が石材の抜き取りのために壊され，奥壁・側壁の上部が露顕した状態であったが，盛土の大半が流出し，土層観察によって，墳裾を確認することができた。また，墳丘全体は腐植土の下層に10～20cmの表土（第5図第1層）が堆積しており，当初の予想に反して落ち込み部以外の残存状況は比較的良かった。

墳丘は，まず斜面上方の地山を掘削し，墳丘基底面の整地作業を行っている。墳丘基底面は標高433.9m付近を上端とし，斜面に沿って削りだし，ほぼ平坦に整地（第一次地山整形）を行っている。さらに，この整地面から石室構築のために地山を掘削（第二次地山整形）し，石室掘方を築成している。その掘削に伴って出た土を後述の石室前半部の盛土として利用したものと考えられる。その後，石材を据えながら裏込め作業が行われている。奥壁側では黄灰色系の粘質土を1層ごとに堅くたたきしめている。一方，側壁では裏込め最下層（第5図第24層）については奥壁と同一層であるが，その上層では黄褐色系の粘質土（第5図第18・19・20層）を用いている。裏込め作業後，墳丘を築くが，その結果，斜面上方には古墳を半周する周溝が巡る（第一次地山整形部分）。周溝の規模は最大幅2.2m，深さは最深部で90cmで，斜面の傾斜に沿って次第に浅くなりながら消滅する。

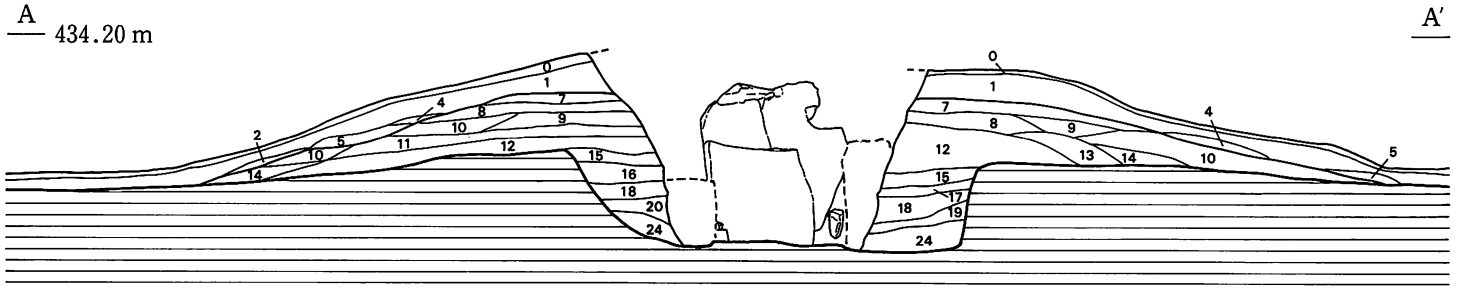
確認できた墳丘の規模は，東西方向が10.5m，南北方向が9.7mで，高さは北側周溝底面からは30cm，南側墳裾からは2.4mで，ほぼ円形の古墳である。盛土の厚さは0.3～0.7mが確認できた。なお石室前半部分は盛土上に石室床面（第5図第25・26・27・28層）を形成しており，その厚さは0.3mを測る。また，石室の前面で外護列石（第6図）2個と前庭部（南北1.1m，東西1.8m）を確認した。外護列石は，横長の石材を据えることで前庭部への墳丘盛土が流出することを防ぐ目的があったと考えられる。

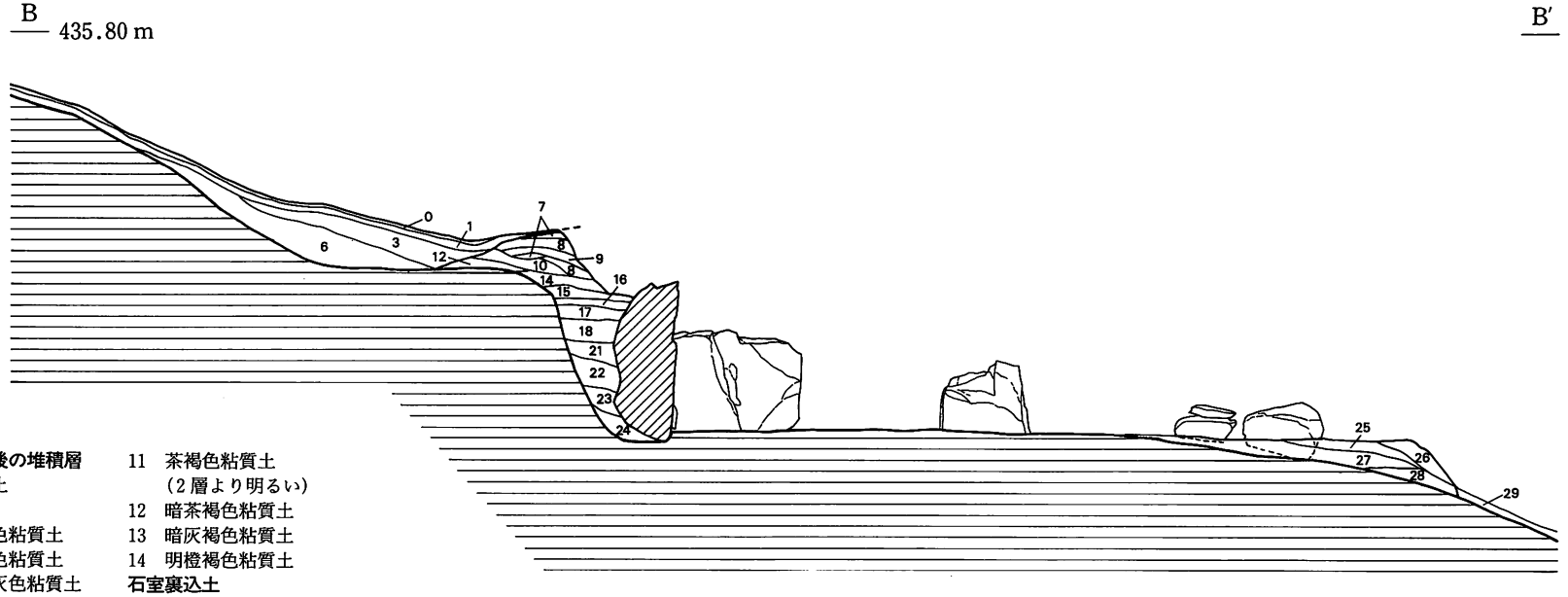


第３図　調査前地形測量図（1：150）



第４図　墳丘測量図（1：150）





土層説明

墳丘築造後の堆積層

0　腐植土
1　表土
2　茶褐色粘質土
3　茶灰色粘質土
4　淡茶灰色粘質土
5　明褐色粘質土
6　淡褐色粘質土

墳丘盛土

7　明茶褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　灰褐色粘質土
10　淡茶褐色粘質土
11　茶褐色粘質土（2層より明るい）
12　暗茶褐色粘質土
13　暗灰褐色粘質土
14　明橙褐色粘質土

石室裏込土

15　橙褐色粘質土
16　淡橙褐色粘質土
17　暗黄灰色粘質土
18　暗黄褐色粘質土
19　黄褐色粘質土
20　淡黄褐色粘質土
21　黄灰色粘質土
22　淡黄灰色粘質土（5～10 cm の風化礫混入）
23　明黄灰色粘質土
24　明黄褐色粘質土（10 cm の風化礫混入）
25　黄灰色粘質土
26　淡黄褐色粘質土
27　明黄灰色粘質土（23 層よりやや暗い）
28　黄灰色粘質土（21 層よりやや暗い）
29　淡黄灰色粘質土

0　5 m

第5図　墳丘土層断面実測図（1：60）

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は石材の大半を抜き取られ，一部の基底石のみが残存していた。このため不明瞭な点も多いが，掘方の形状や石材の抜き取られた痕跡の検討から，石室はほぼ南方向（S 14° W）に開口する無袖式の横穴式石室であると推定される。

(1) **掘方**（第 7 図，図版 5 a・b）

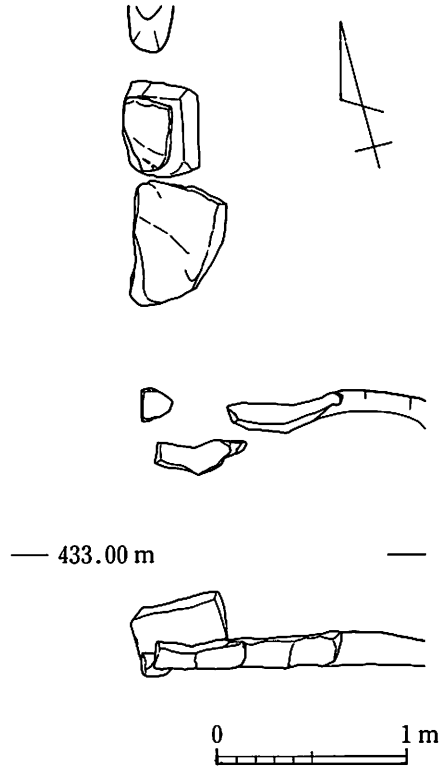
石室掘方の規模は，長さ 6.72 m，幅は奥壁側 3.05 m，開口部側で 1.89 m，深さは北東部で最も深く 1.17 m である。掘方の深さは開口部に向かって徐々に浅くなっている。平面形は隅丸不整長方形を呈しているが，開口部に向かって若干狭くなっている。また，基底石は石の下面の形状に合わせて掘方底面をさらに 7～15 cm 掘り下げ，安定させている。掘方壁面の傾きは，垂直にちかく，石室の奥壁，両側壁基底石とは近接しており，あらかじめ構築する石室の規模や石材の大きさを考慮して掘削が行われている。

(2) **石室**（第 7 図，図版 3 a・b）

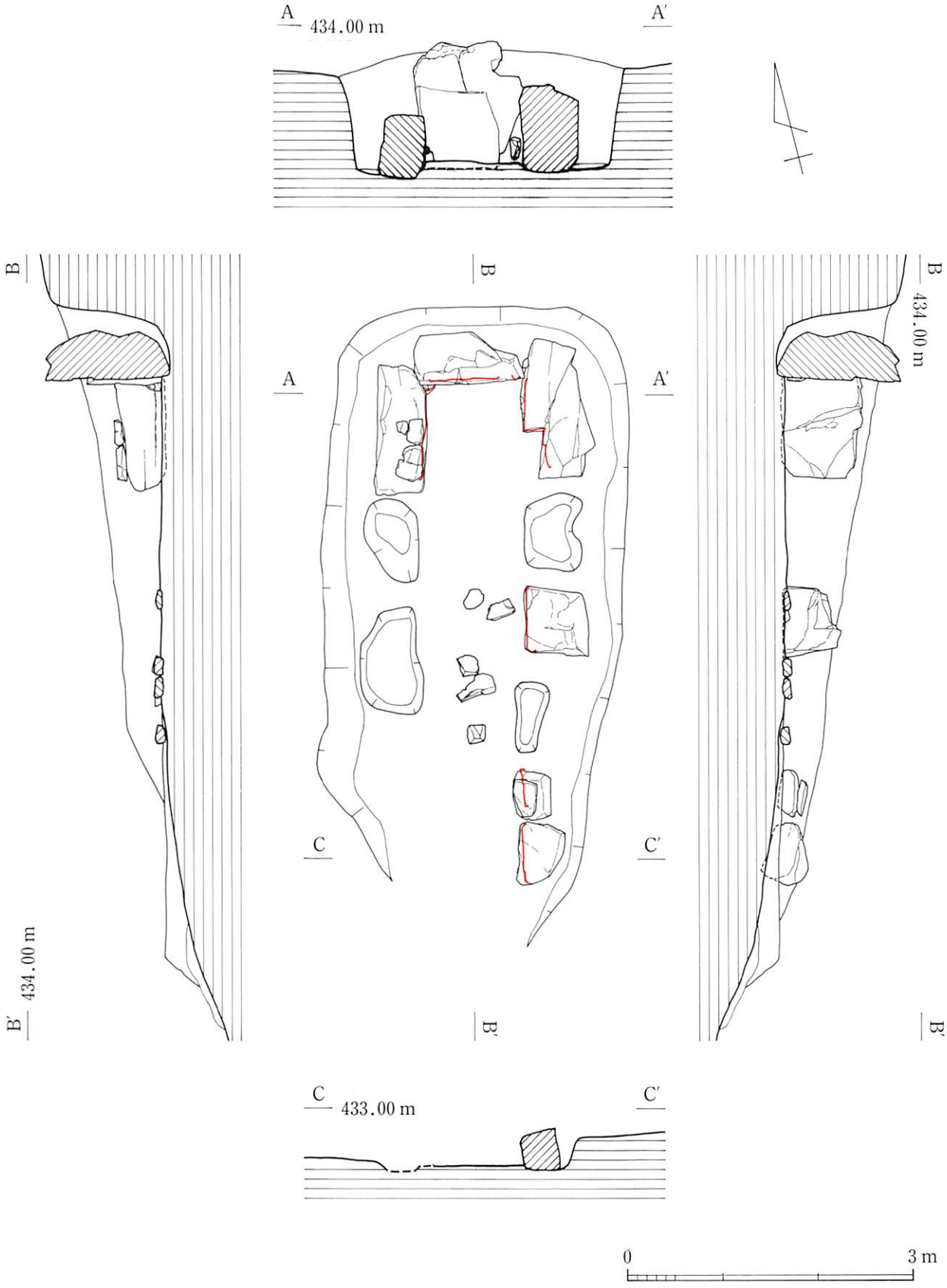
石室規模は，東側側壁で全長 5.30 m を測る。西側側壁は石材が奥壁側の 1 個を除いて残っておらず，不明である。幅は，奥壁側で 1.01 m を測る。中央付近では東側側壁のみ基底石が残っているため明確にできないが，西側側壁の石材の抜き取られた痕跡をもとに勘案すると，約 1 m であったと推定される。開口部の幅は西側側壁で石材を抜き取られた痕跡を検出することができなかったため，不明である。

石室を構築している石材は奥壁が斑状黒雲母花崗岩，側壁は黒雲母花崗岩を用いている。奥壁は大型の石材を広口面を石室内に向けて据えている。高さ 113 cm，最大幅 112 cm，奥行 51 cm を測る。二段目以上の石材は残っていない。

西側側壁は，奥壁側の基底石とその上の小石材のみ残存していた。大きさは 50 cm×132 cm，奥行 52 cm の大型の石材を横位に据えている。この基底石上の小石材は奥壁側のもので 10 cm×28 cm，奥行 18 cm，開口部側のもので 10 cm×40 cm，奥行 28 cm の大きさで，横積みしている。これらは，基底石と二段目の石材との詰石であったと考えられる。東側側壁は，奥壁側部の基底石と石室中央付近の基底石，開口部付近の基底石 2 個及びその上の小石材のみが残存していた。奥壁側の基底石は 91 cm×147 cm，奥行 78 cm の大型の石材で広口面を石室内に向けて据えている。なお，この石材は石室内面が破砕されて一部剝落しており，石材抜き取りの際に破砕されたものと思われる。中央付近の基底石も大型の石材であるが，上部及び開口部側が破砕され，石室構築時の大きさは明確にで



第 6 図　外護列石実測図（1：40）



第７図　石室実測図（1：60）

きない。現存する大きさは，61 cm×71 cm，奥行 68 cm である。開口部付近の基底石は，小型の石材が用いられている。奥壁側が 24 cm×49 cm，奥行 41 cm で，開口部側は 50 cm×66 cm，奥行 51 cm で，どちらも横位に据えている。なお，奥壁側基底石の上に残る石材は，10 cm×38 cm，奥行 24 cm で横積みされている。二段目の石材が詰石であったかどうかは明確にしがたい。閉塞石及びその痕跡は検出されなかった。

以上のように石室の遺存状況は決して良いとはいえないが，奥壁側両側壁及び中央付近の基底石には比較的大型の石材を用い，開口部付近では小型の石材が用いられ，使用している石材の大きさに違いが認められる。構築時にはこの使用した石材によって玄室と羨道とを区別していた可能性がある。

(3) 床面（第 8 図，図版 4 a）

石室床面は，地山整形部分はほぼ水平であるが，先述の盛土整形部分は開口部へ向かって緩やかに下っている。また，石室中央付近（奥壁から約 2 m）から開口部へかけて棺台石と考えられる石材が 5 個出土している。大きさは 10 cm 位のものから 40 cm を測るものまであるが，いずれも床面からほぼ 10 cm 程度の高さで上面が揃っている。これらの石材の間から鉄釘が出土していることから，木棺が存在していたと考えられる。石室奥部（奥壁から 2 m まで）には棺台石等は検出できなかったが，棺の配置には十分な空間であることや鉄釘がこの部分でも出土していることから玄室内に 2 棺以上存在していたと推定される。

(4) 遺物出土状況（第 8 図，図版 4 a・b・c）

本古墳から出土した遺物は須恵器 5 点，似非須恵土師器 1 点，鉄製品 8 点である。このうち石室内から出土したものは，須恵器 3 点（装飾付須恵器の装飾部小壺 1 点，椀破片 1 点，長頸壺 1 点），鉄器 8 点（鉄釘 5 点，用途不明 3 点）で，いずれも床面から出土している。そのほかは周溝内埋土中から須恵器杯身 2 点，開口部側試掘溝で似非須恵土師器の長頸壺 1 点が出土した。似非須恵土師器の出土位置は前庭部の下方にあたり，掻き出されたものか，あるいは本来前庭部に置かれていたものが墳丘盛土の流出などによって移動したのかは不明である。

(5) 出土遺物

(a) 石室内出土遺物

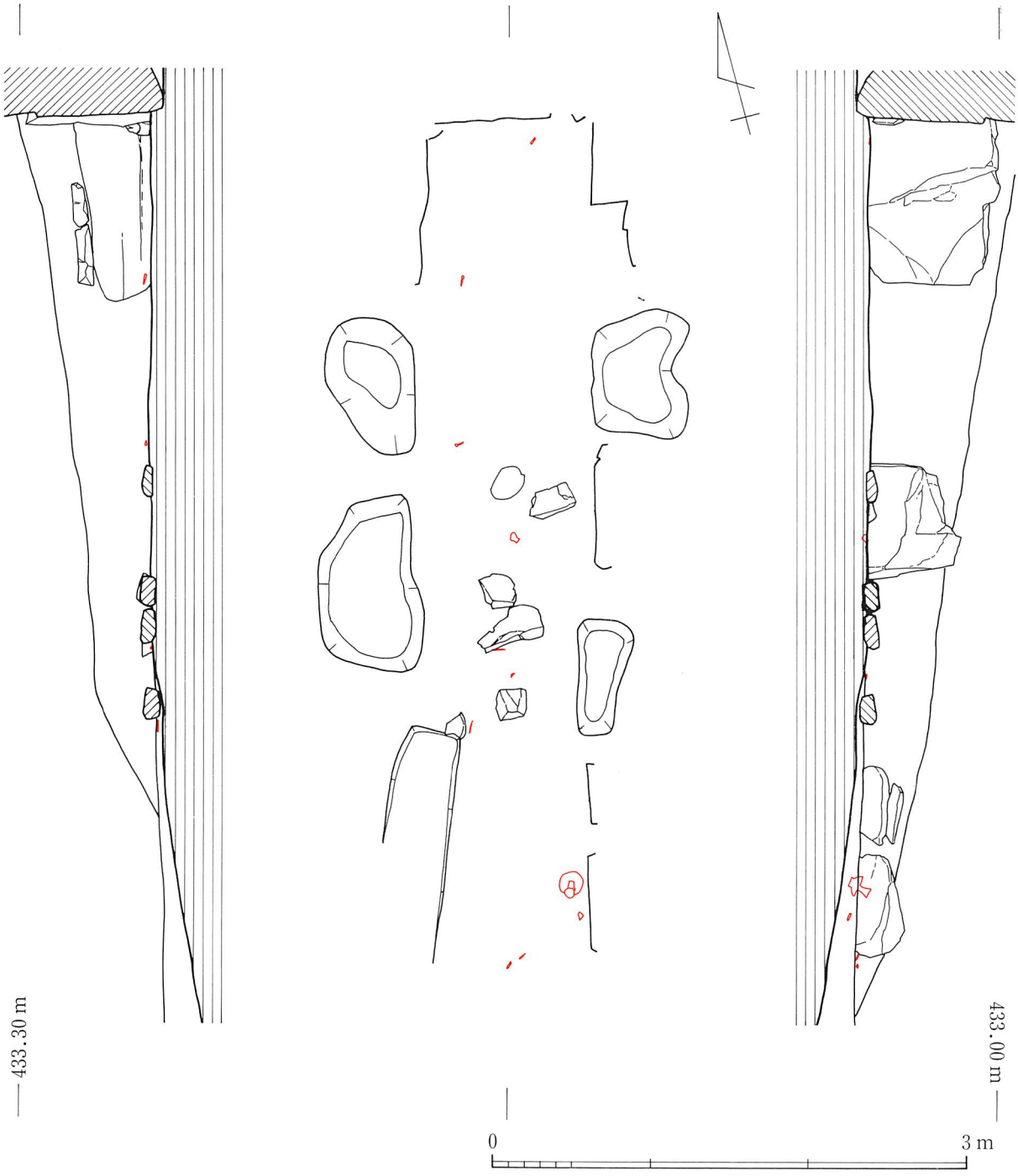
須恵器（第 9 図，図版 6 a）

装飾付須恵器の装飾部（1）　装飾部分の小壺である。口縁端部が一部欠失している。口頸部は外反して外上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。肩部は張らず胴部は丸みをおびる。胴部最大径はほぼ中央に求められる。口縁部から胴部にかけて自然釉が付着している。装飾部分のみであるため，全容は明らかでないが，底部破断面の観察では一方で上方に向かっているのに対し，他方では下方にナデ付けられた痕跡が認められる。焼成は良好，色調は青灰色である。大きさは，口径 4.0 cm，基部径 2.6 cm，胴部最大径 5.1 cm，器高 6.2 cm である。

椀（2）　底部が欠失している。全体の約 1/3 の破片である。丸みを帯びる胴部から口縁部は外上方に短く立ち上がり，口縁端部は丸くおさめられている。焼成は良好である。大きさは，復元

口径 6.9 cm，復元胴部最大径 8 cm，器高は不明である。

長頸壺（3）　口縁端部の一部が欠失しているが，ほぼ完形である。口頸部は外上方に外反気味に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめられている。口頸部の中位に 1 条の浅い凹線が巡る。肩部はなだらかで，浅い沈線が巡る。胴部は肩部近くに最大径をもち，1 条の浅い凹線がみられる。頸部と胴部の接合部には突帯状の高まりが巡る。口径は口頸基部径よりも大きい。底部にはハの字形の比較的高い高台を貼り付けている。焼成は良好で，大きさは，口径 8.4 cm，口頸基部径 4.2



第 8 図　石室内遺物出土状況実測図（1：40）

cm，胴部最大径 17.3 cm，器高 21.0 cm である。

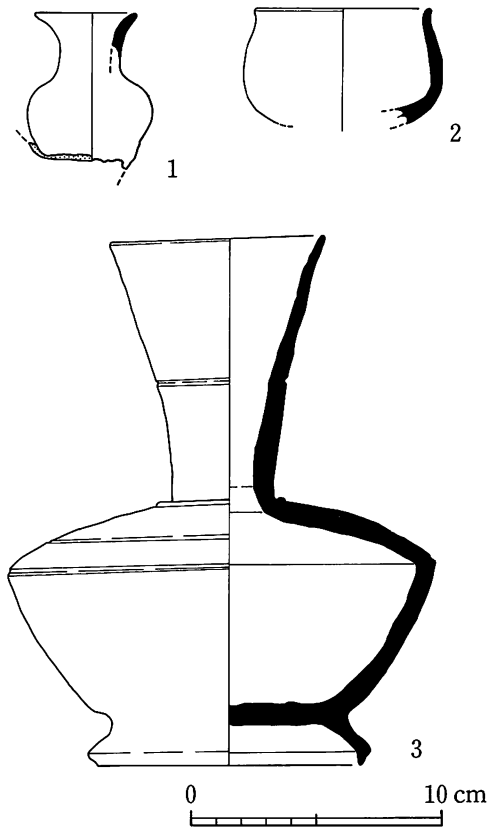
鉄器（第 10 図，図版 6 b）

鉄釘（4～8）

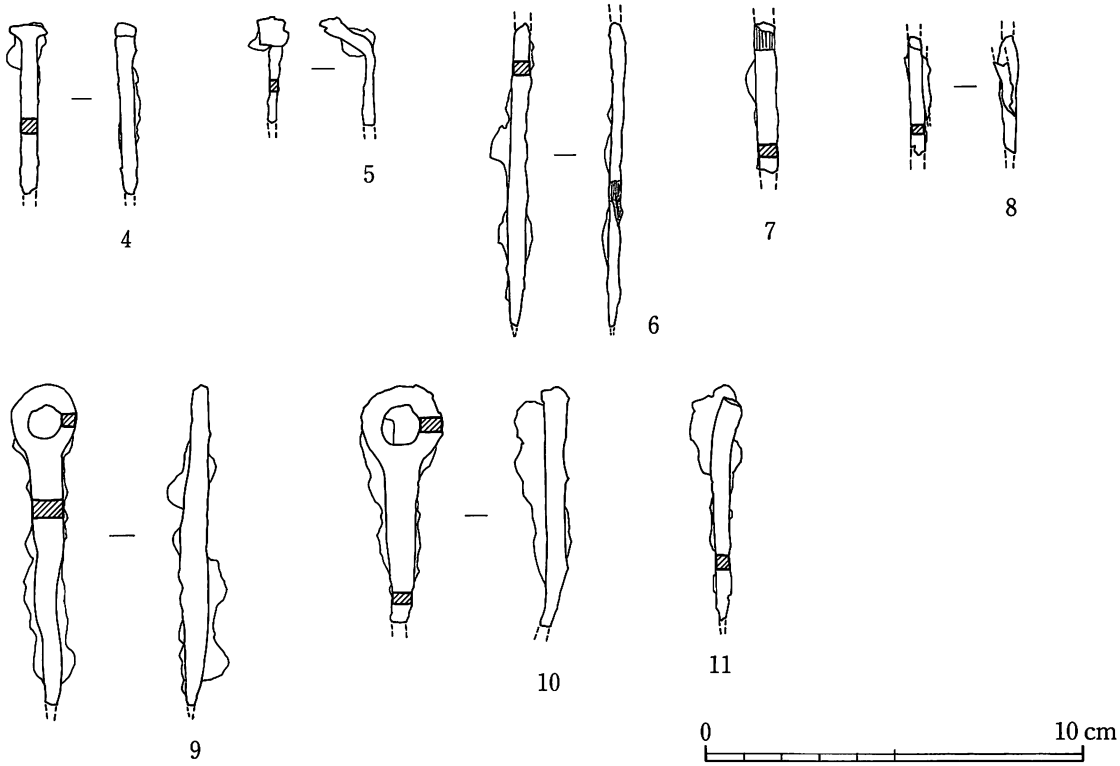
4・5 は釘頭が残っており，4 は T 字状を呈し，5 は逆 L 字形を呈している。いずれも先端部が欠失している。木質は認められない。6～8 は釘頭，先端部を欠失しているが，6・7 は一部木質を残している。

用途不明の鉄器（9～11）

9・10 は頭部が環状になっている。先端部は欠失しているが，先細り気味で，先端部寄りがいずれもやや曲っている。9 は残存長 8.4 cm，断面は方形を呈する。10 は残存長 6.2 cm で，断面は方形である。11 は残存長 5.8 cm，断面は 4 mm×5 mm の方形の釘状である。頭部は腐食しているため，本来の形状は不明であるが，先端部にかけて先細りとなっている。出土している鉄釘とは全体のつくりが異なっており，用途は不明である。



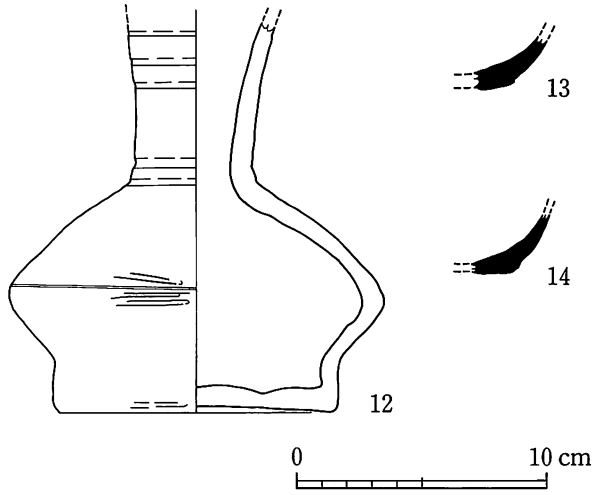
第 9 図　石室内出土遺物実測図（1）（1：3）



第 10 図　石室内出土遺物実測図（2）（1：2）

(b) 調査区内出土遺物（第11図，図版6c）

12は，開口部側試掘溝内から出土した似非須恵土師器[1]と考えられる長頸壺である。口縁端部は欠失している。頸部に3条の不明瞭な凹線，頸部と肩部との接合部に2条の凹線，胴部が最大に張り出した部分に凹線が巡る。外面の調整は荒れているため明確にできないが，回転ナデを施した後，ミガキの痕跡が部分的に認められる。底部は，若干中央部分が窪んでいるが，ほぼ平坦である。焼成は良好で，色調は内外面，断面とも赤褐色である。大きさは，口頸基部径5.1 cm，胴部最大径15.1 cm，底部径11.0 cm，残存器高15.5 cmである。



第11図　調査区内出土遺物実測図（1：3）

13・14は，須恵器杯身の破片である。古墳北西側周溝内の埋土中から出土した。いずれも体部中位から底部にかけての破片であるため，全容は明らかでない。調整は内外面とも回転ナデである。底部には不定方向の雑なナデが認められる。同一個体ではない。焼成は良好で青灰色を呈している。

註

（1）似非須恵土師器の名称は，橋口達也「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学　横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ』 横山浩一先生退官記念事業会　1988年によった。

V　ま　と　め

風呂之元古墳は横穴式石室を主体部とする円墳であることが明らかとなった。出土遺物が少ないことや石室の石材が多量に抜き取られ，石室の残存状況が悪いため，本古墳の性格等については必ずしも明確にはできなかったが，本古墳の特色を述べた後，世羅町内の他の古墳との比較検討を若干試みて，まとめとしたい。

1　立地

本古墳は江の川水系馬洗川の支流黒渕川の最上流部に位置している。西から東へ延びる低丘陵（標高約 440 m）の南側斜面に立地している。周囲は河川によって形成された小さな谷が入り組んでおり，本古墳も開口部前面に谷がある。石室はこの谷に向かって（南方向に）開口している。

2　墳丘

墳丘の規模は，東西方向 10.5 m，南北方向 9.7 m，高さは現状で 0.3～2.4 m である。平面形はほぼ円形を呈する。斜面上方（北方向）には最大幅 2.2 m，深さは最深部で 0.9 m の周溝が墳裾を半周している。周溝は斜面下側部分では確認できなくなっている。

開口部東側で検出した外護列石については，向田裕始氏[1]が分類を行っている。その分類によると，本古墳のものは A―2 類に分類される。A―2 類はこれまでに 6 世紀中葉～8 世紀初頭に築造された古墳で確認されており，この列石は時代の下降とともに簡略化するとの指摘[2]があるが，簡略化した列石は，6 世紀後半に比定されている山県郡大朝町の登古墳[3]，神石郡神石町の高塚山第 2 号古墳[4]などでも確認されている。列石の簡略化は墓前祭祀や古墳造営の省力化との関係とともに検討すべきとの問題提起[5]があり，未だ解明されていない。こうした石室前面部の列石の果たす役割については，墳丘盛土の流出防止，石室の補強や墓前祭祀を行う場所の確保などが想定される。現在までに，世羅町内で列石を伴う古墳は，本古墳と同じ徳市に所在する石ガ谷古墳及び多田三ツ塚第 1 号古墳で確認[6]されている。それぞれの古墳は距離こそ 1.5～3.0 km 離れた地点に所在するが，いずれも江の川水系黒渕川流域に立地するという点で一致している。世羅町内のもう一つの古墳密集地域である芦田川流域では列石をもつ古墳が未だ確認されていないことは，両河川が古墳時代の地域の文化形成に大きく関わっていたことが推定される。しかし，石ガ谷古墳，多田三ツ塚第 1 号古墳とも本格的な発掘調査は実施されていないため，列石の規模，形態等詳細については不明であり，また，世羅町内での古墳の発掘調査例も限られているため，現段階で断定することはできない。

3　石室

東側側壁で残存長 5.30 m，奥壁側の幅 1.01 m の無袖式横穴式石室で，奥壁及び両側壁最奥部の基底石は大型の石材を用いている。西側側壁は石材を横位に据え，東側側壁は広口面を石室内に向けて据えている。また東側側壁中央付近の基底石も大型の石材を使用している。開口部付近では基底石は小型の石材を用いており，使用する石材によって玄室と羨道とを区別していたと推

定される。西側側壁の基底石の上に残る二段目の石材は，約 30 cm の扁平な石材を横積みにしている。石室内には棺台石が 5 個残されていた。

4　出土遺物

本古墳から出土した土器は僅少であり，古墳の時期を決定する資料として検討できるのは，石室内から出土した須恵器の長頸壺（第 9 図 3）のみである。口縁部の形態や口径と口頸基部径との関係や胴部の張り，高台の形態を勘案すると中村浩氏の陶邑編年[7]の「Ⅳ型式 1 段階」，田辺昭三氏の編年[8]では「MT 21 型式」に相当すると考えられ，7 世紀末～8 世紀初頭に比定できる。

石室中央付近床面から出土した装飾付須恵器は装飾部の小壺（第 9 図 1）のみであるため，いわゆる親器[9]の詳細な検討はできないが，小壺の破断面の観察から親器は装飾付壺であったと考えるのが妥当であろう。また，世羅町においては，広義の装飾付須恵器[10]がこれまでに東神崎のこみどう古墳，重永の神岡第 4 号古墳，賀茂の因幡第 1 号古墳と亀ノ尾第 2 号古墳，井折の安佐古墳と助迫山古墳，青山の大迫第 4 号古墳，自光窯跡の 8 遺跡 9 例[11]が知られている。いずれも芦田川流域からの出土例であり，江の川水系流域での出土は初例である。世羅町は県内でも特に出土例が多い地域である。なお，装飾付須恵器では，岸本雅敏氏[12]，柴垣勇夫氏[13]，山田邦和氏[14]による形態分類や編年を試みた研究が知られている。しかし，これらの研究は親器を中心に行われたものであるため，親器が不明である本古墳に直接あてはめることはできない。今後の研究の進展を待ちたい。

開口部試掘溝の埋土中から出土した似非須恵土師器[15]（第 11 図 12）は，表面の風化が著しいが，ロクロによる整形，回転ナデが内外面ともに認められる。また，口頸部及び胴部には凹線が巡るなど，その整形・調整技法と器形は須恵器を思わせる。広島県内では千代田町の奥今田第 3 号古墳[16]で石室床面から出土した瓦に次いで 2 例目である。奥今田第 3 号古墳は片袖式の横穴式石室を内部主体とする古墳で，築造時期は 6 世紀中葉に比定されている。本古墳での出土位置を復元すると前庭部下方と想定されるが，墓前祭祀に使用されたものか，追葬に伴って掻き出されたものであるかは不明である。

鉄釘の出土位置や棺台石の配置を考えると，本古墳の石室では，2 棺の配置が可能である。9・10 は環状の頭部をもつ鉄製品である。2 点がセットで出土し，しかも先端部にかけて先細りとなっていることなどから，木棺の飾り金具などの可能性が考えられる。

5　古墳の年代と性格

上述したように，古墳の時期を示す出土遺物は須恵器の長頸壺のみである。さらに，この長頸壺は石室内の開口部から出土し，追葬に伴って副葬されたと考えられる。

本古墳と同じ世羅町内の江の川水系流域に立地する古墳の発掘調査例には，徳市の八反田古墳[17]，津口の湯船第 5・6 号古墳[18]があり，いずれの古墳ともその築造時期は 6 世紀後半から 7 世紀初頭に比定されている。奥壁の石材の用い方をみると，本古墳のものは，世羅町内の江の川水系に立地する古墳の特徴と推定されている[19]これらの古墳とは異なっているが，他地域の同時期に比定されている古墳の無袖式の石室構造と比較して大きな差異はなく，現段階では，同様の時期と推

定したい。

本古墳の周辺地形をみると，河川によって形成された小支谷が幾重にも入り組んだ地形をしており，広大な可耕地を見いだすことはできない。本古墳から南西へ約3kmの地点にカナクロ谷製鉄遺跡が確認されている。本古墳の被葬者はこうした鉄に関する生産基盤をもっていた人物も想定されよう。

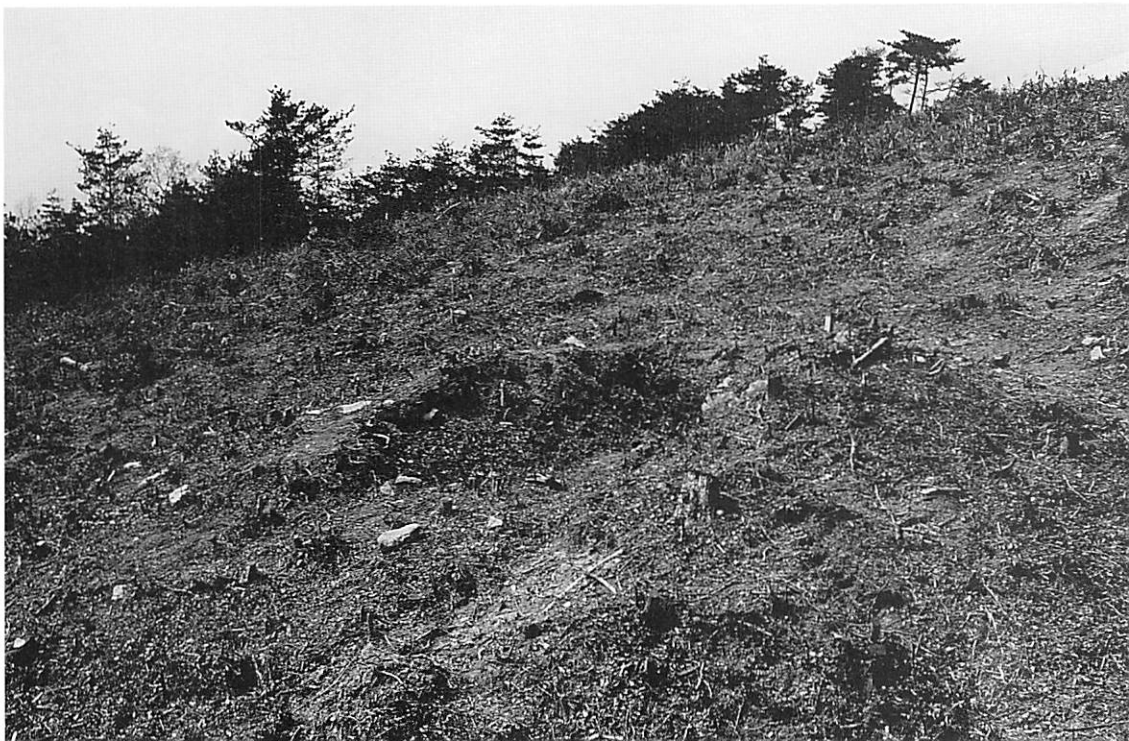
註

（1）比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』 1979年
（2）広島県教育委員会「篠津原第3号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978年
（3）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「登古墳」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（I） 1991年
（4）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書』 1987年
（5）恵谷泰典「列石をもつ古墳 ―広島県内の調査例を中心に―」『研究輯録』III 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1993年
（6）世羅町教育委員会『世羅町の古墳』 1990年
（7）中村 浩『和泉陶邑窯の研究 ―須恵器生産の基礎的考察―』柏書房 1981年
（8）田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
（9）親器という呼称については，山田邦和「装飾付須恵器の分類と編年（上・下）」『古代文化』41巻8・9号 古代学協会 1989年による。
(10) 註（9）に同じ。
(11) この類例数については，山田邦和「装飾付須恵器総覧 ―装飾付須恵器の基礎的研究3―」『古代學研究所研究紀要』第2輯 1992年及び註（1），註（6）をもとに算出した。
(12) 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22巻第85号 考古学研究会 1975年
(13) 柴垣勇夫「装飾付須恵器の器種と分布について」『愛知県陶磁資料館 研究紀要』3 愛知県陶磁資料館 1984年
(14) 註（9）に同じ。
(15) 橋口達也「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学 横山浩一先生退官記念論文集I』横山浩一先生退官記念事業会 1988年
(16) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田古墳群」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』（I） 1997年
(17) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『八反田古墳』 1981年
(18) 世羅町教育委員会『湯船第6号古墳』 1995年
(19) 註（18）に同じ。

図版 1

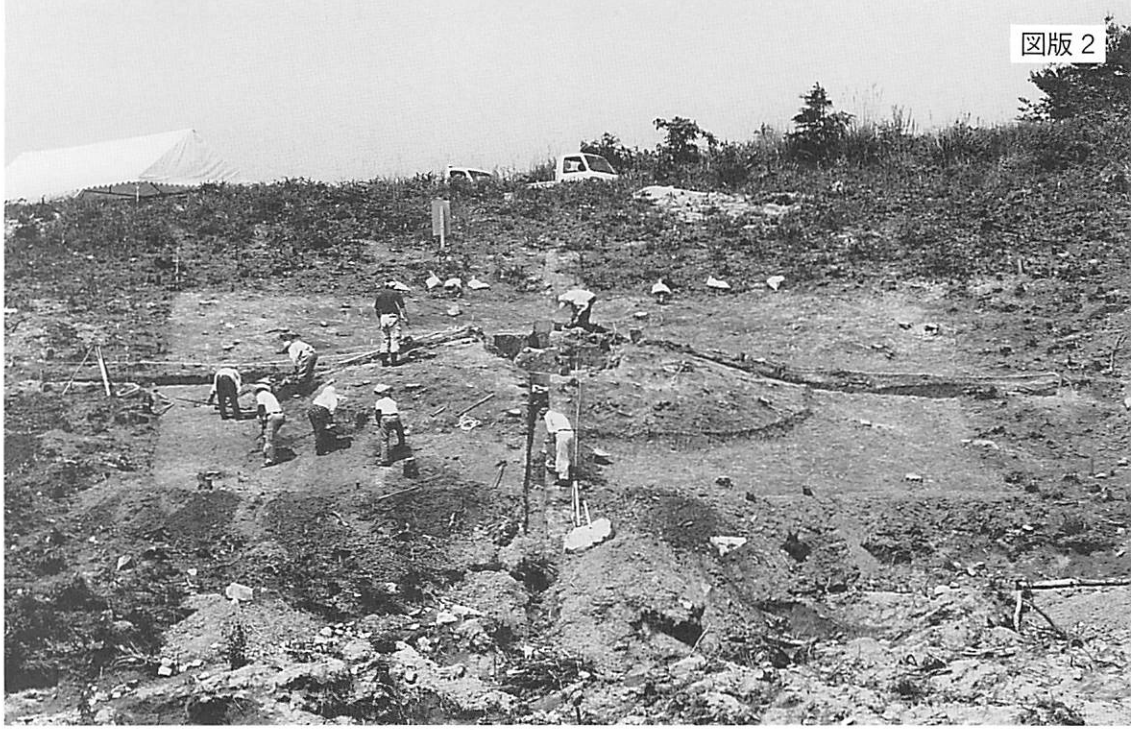
a　古墳遠景
（南東から）

b　古墳遠景
（南西から）

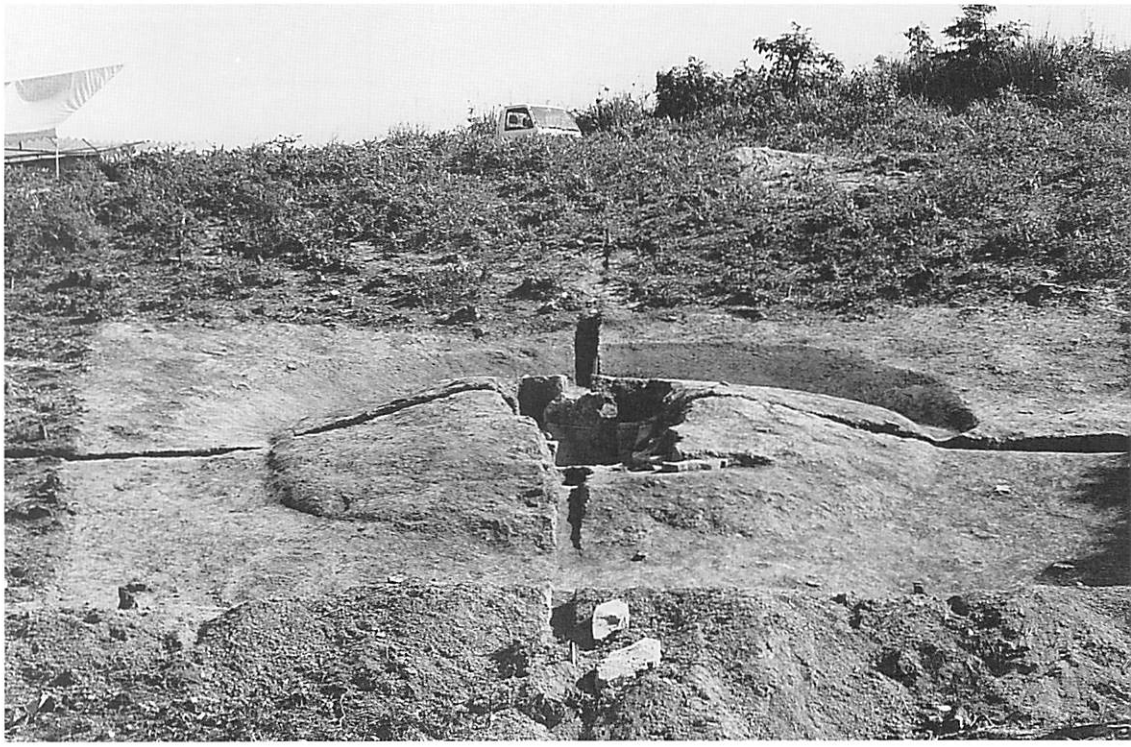


c　調査前近景
（南東から）

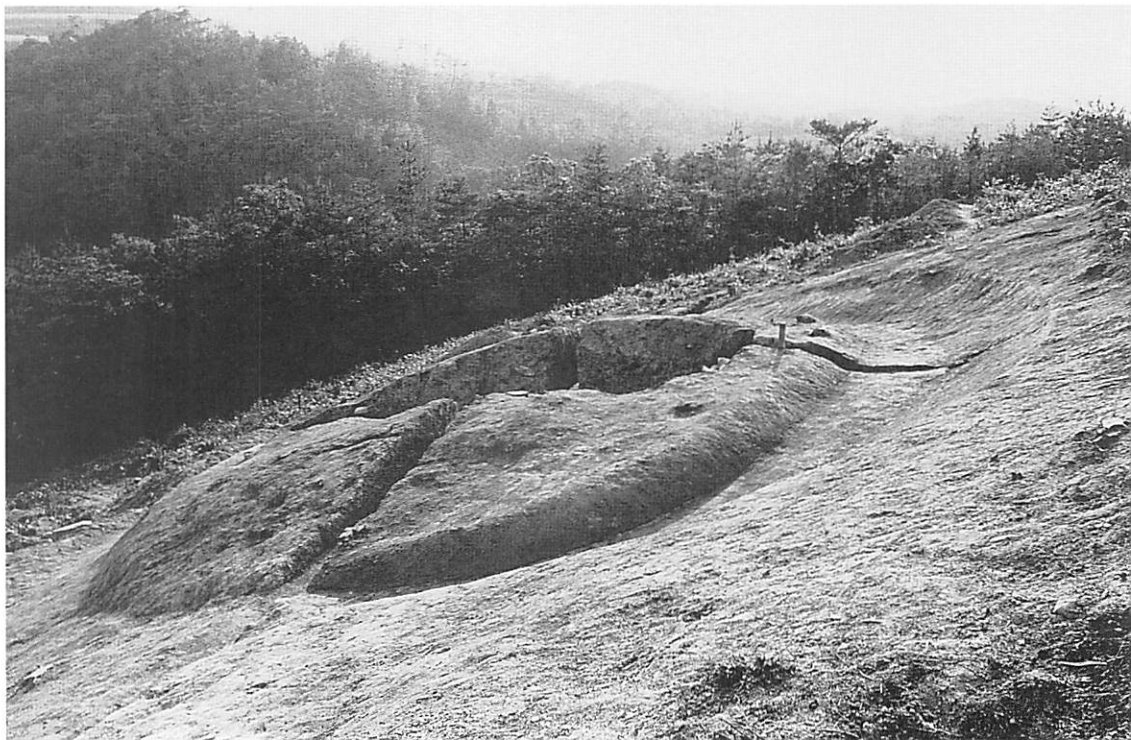
図版２



a　作業風景
（南から）



b　墳丘検出状況
（南から）



c　墳丘検出状況
（北東から）

図版３

a　石室
（南から）

b　奥壁
（南東から）

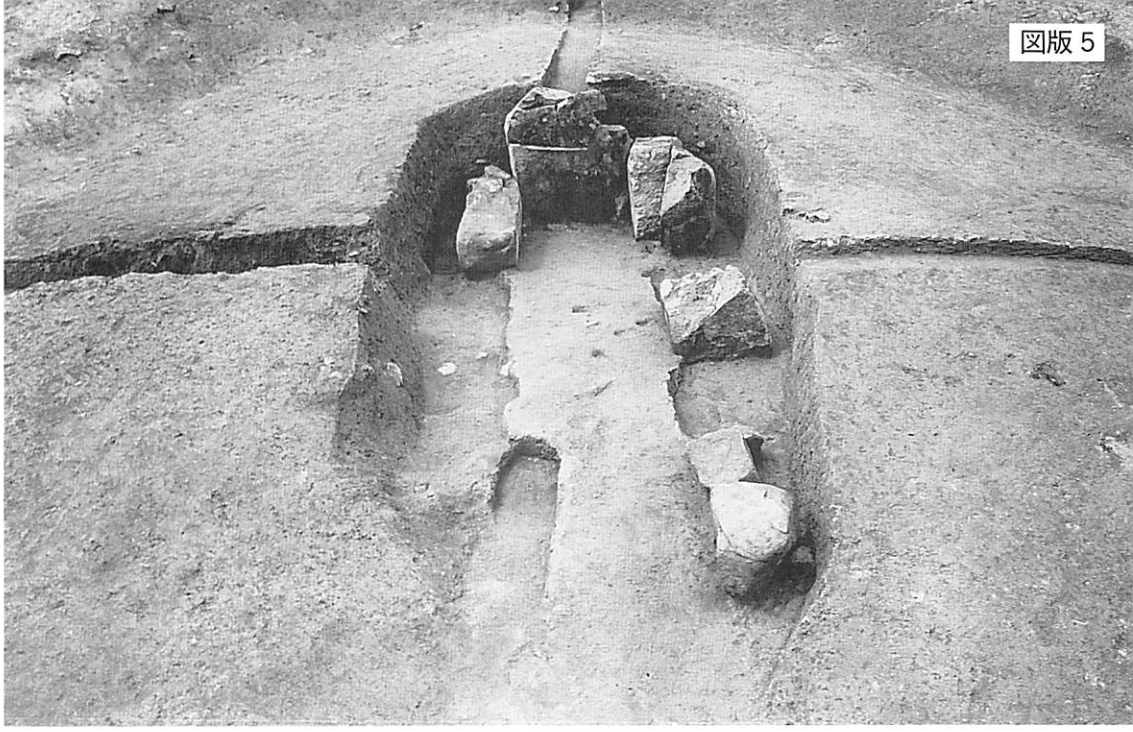
図版４

a　石室内
（南西から）

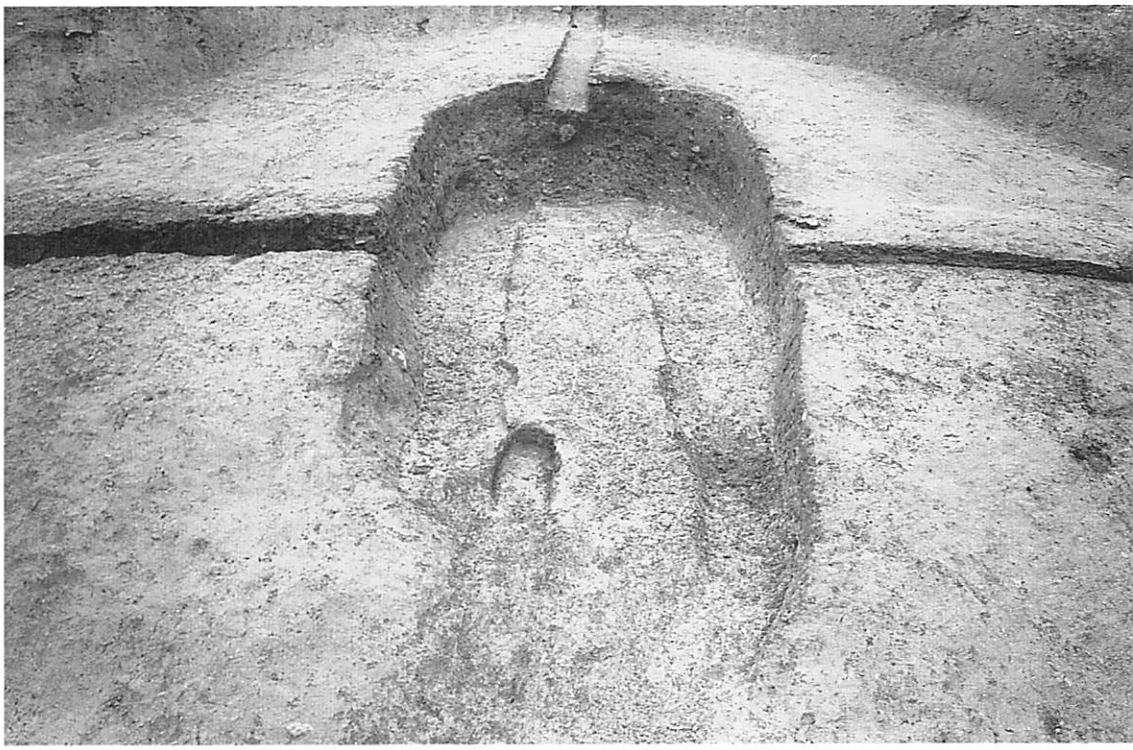
b　遺物出土状況
（石室中央）

c　遺物出土状況
（開口部側壁側）

図版 5

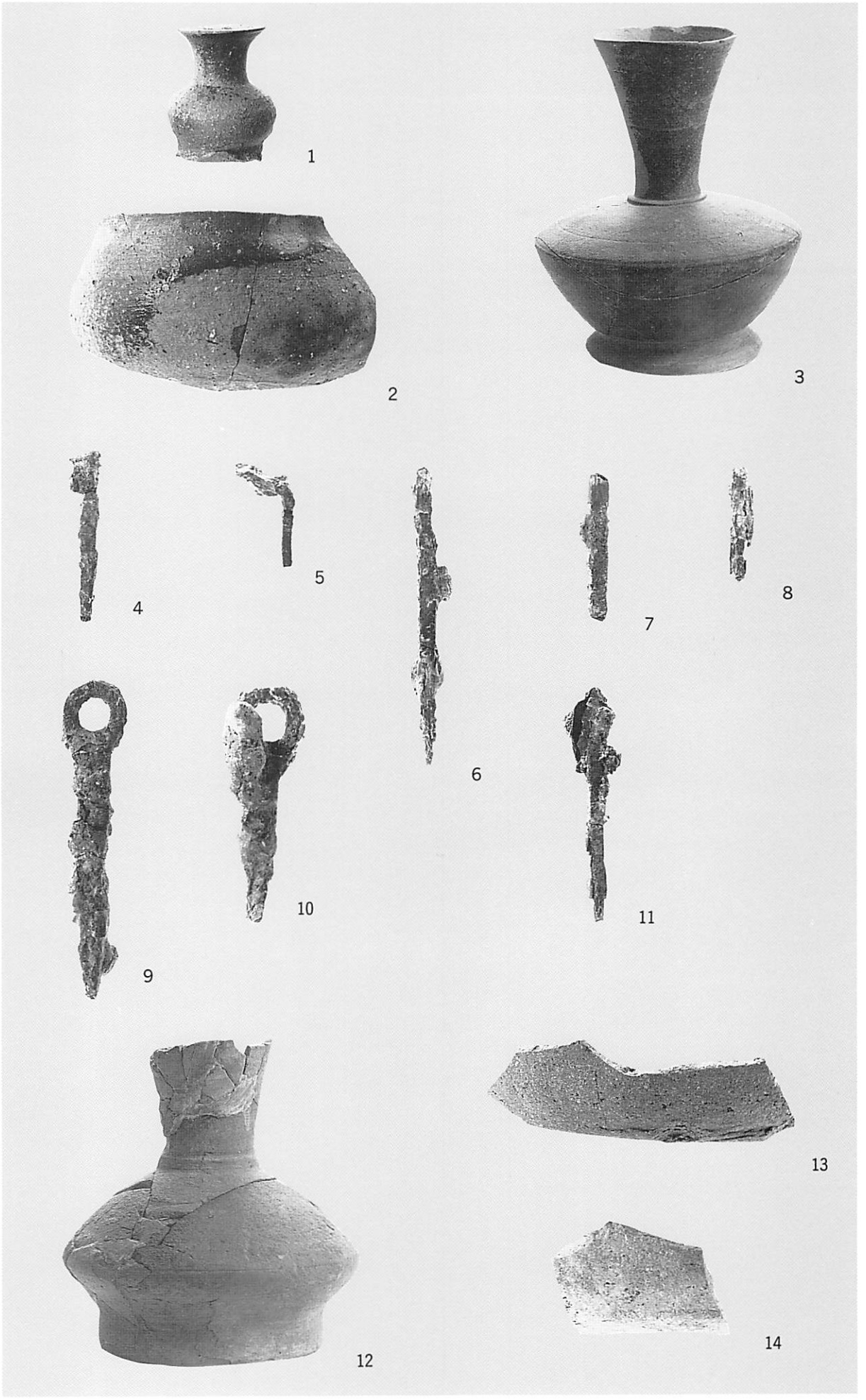


a　基底石
（南から）



b　完掘
（南から）

c　調査後遠景
（南東から）



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふろのもとこふんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	風呂之元古墳発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第177集
編著者名	岡野克巳
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦1999年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
風呂之元古墳 (ふろのもとこふん)	広島県世羅郡世羅町大字徳市字風呂元560番地の1他 (ひろしまけんせらぐんせらちょうおおあざとくいち あざふろのもと)	34462	154	34度38分02秒	133度00分00秒	19980413～19980605	400㎡	広島中央区域農用地総合整備事業に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
風呂之元古墳	古墳	古墳時代	古墳 1基 (横穴式石室)	須恵器 似非須恵土師器 鉄器	装飾付須恵器 (小壺)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第177集

風呂之元古墳発掘調査報告書

発行日 1999(平成11)年3月19日

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082) 295－5751
FAX (082) 291－3951

印刷所 電子印刷株式会社